

## 李光洙（イグアンス）―韓国知識人の苦悩

大津 隆文

波田野節子著『李光洙―韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』を読んだ。同書によれば李光洙は「韓国の夏目漱石である。韓国併合前後に明治学院、早大で学び、文筆活動を始めた李は、3・1独立運動に積極関与するが挫折。『東亜日報』編集局長などを務め多くの小説を著した。だが日中戦争下、治安維持法で逮捕。以後「香山光郎」と創氏改名し日本語小説を発表。終戦後は「親日」と糾弾を受け、朝鮮戦争で北に連行され消息を絶つ」とある。

私が彼の名前を知ったのは、以前ハングルを勉強していた時テキストに彼の作品の一部が出ていたことによる。易しい文章にじむ心優しさに惹かれた。同時に彼が対日協力者として非難を浴び、消息不明という悲劇的な最期を遂げた人生も印象に残った。

彼が知的エリートとして朝鮮の独立を心から願っていたことは疑いが無い。民族としての実力を高め独立を達成しようとして、「民族改造」のため「修養同友会」「ブ・ナロード（人民のなかへ）運動」等に取り組んだ。それは一朝一夕に達成できるものではなく、また、非合法活動や武力闘争による独立実現も現実的ではなかった。朝鮮人の実質的な処遇の改善を図らなため、彼があえて選んだのが日本当局に協力する道だったのではなからうか。

大韓民国成立後の彼に対する風当たりは強かった。大東亜文学者大会への参加、在日韓国留学生に対する学徒兵志願の勧誘等が強く糾弾された。反民族行為処罰法の調査委員会の尋問に答えた「私は民族のために親日をしました」という言葉に感慨を覚える。母国の独立を実現するため何がベストであったのだろうか。

韓国では親日派の追求は今でも厳しく行われている（親日派⇨売国奴、反日⇨愛国のイメージがあるという）。同胞にそこまで厳しくやるのかと感じるが、同胞だからこそ赦しがたいであろうか。帝国主義は世界の歴史の流れであったかも知れないが、他国の植民地化は大きな傷跡を残したものとあらためて感じた。